

Chim ↑ Pom

《May, 2020, Tokyo (大久保駅前) –青写真を描く–》

2020

コロナ禍で人の姿が消えた街の光を集めた作品です。今の「東京」を表現したともいえそうです。10年後、20年後に「TOKYO2020」という文字を見たときに私達が思い浮かべるのはオリンピック・パラリンピックでしょうか、コロナ禍でしょうか。

現代美術の要素の一つが「問いかけ」です。鑑賞者が「問いかけ」について考えるところまで含めて作品になります。Chim ↑ Pom は社会問題を積極的に取り上げます。時には批判されることもあります。「(鑑賞者の)リアクションに臨機応変に対応することで作品がみんなのものになっていく」とメンバーの一人は語っています。



ガイドスタッフ I

大岩オスカール 《ゼウス、オリンピクの神》 2019

ゼウスって知っている？そう、ギリシア神話の全知全能の神様だね。古代ギリシアの都市、オリンピアにゼウスを祭る神殿があって、四年に一度、奉納競技会が開かれたそうだよ。

さて、この大きな横長の作品をじっくり見てみよう。リオ・デ・ジャネイロ、東京、パリ。オリンピック開催都市が右から左へと開催順に並んでいるね。では、ゼウスはどこにいるのだろう。ヒントは「肖像画は縦置き」。答えはコレクション展入り口でもらえる冊子の11ページ目にあるよ。

ガイドスタッフ Y



ガイドスタッフ M



河原 温 「Today」シリーズ について

質問！ 何だと思いました？

「カレンダー」?? 実は、これは「デイト・ペインティング」と名付けられていて、秘密は、この「絵」を制作した「日付」が描かれていることなんだ。作品をその日中に完成させたり、さらに、このTodayシリーズは、1966年から2013年まで“ず〜っと”制作され続けていたり、つまり作家が生きた「時間」をテーマにしているんだ！他に、文字表記＝作品を描いた場所（国）の公用語とか、使う色にも決まりがあって、その日の新聞が貼られた作品保管箱があるものもあつたりするんだよ。

河原 温

《One Hundred Years Calendar—20th Century "19,221 days"》
1985

作品が制作されたのは 1985 年、河原温の人生はこのあと 2014 年まで「29,771 日」続いていきます。その間、丸印はひとつひとつの灯りのように繰り返されていったのです。それを留めて記す河原温の作品は、今日という日を深く追求しながらも心とらわれずに手放すことができる人のみがなしうる行為によるものではないかと感じました。

世界中の誰もがその意味を共有できる数字と丸印という記号の圧倒的な並びと対面し、人の人生は限られた時間だと知覚する覚悟は少しの怖さと共に清々しさも私の心に届けてくれます。

ガイドスタッフ 〇



平田 実 [1960s-70s 日本の前衛美術家の記録] より
赤瀬川原平「梱包」作品について

「梱包された椅子」が展示されているようですが…。これは果たして芸術作品なのでしょうか。そう疑問に持たれた方もいるかもしれませんね。絵画や彫刻だけが芸術作品ではない。まさに過去の美術に対する挑戦ともいえるような作品がたくさん登場した時代に赤瀬川原平によって制作されたものです。

その形から梱包物は椅子のようですが、どのような素材・色の椅子が包まれているのでしょうか？そのように想像を膨らませながら鑑賞してみるのも良いかもしれないですね。様々な見方ができると、まるで作者が作品の見方を鑑賞者に委ねているかのようで面白いです。



大岩オスカー 《動物園》 1997

くっきり刻まれた影に誘われると、その先には感情移入してしまいそうな生命を感じる何か。高架上には高速道路や鉄道が走っているのかも知れません。藁づみのようにもみえる廃材は、住まいの象徴、残がいでしょうか。

作家はバブル期に来日し、家庭を築き、東京の下町・北千住で11年を過ごしました。この作品は隣駅・南千住の再開発を題材にしたものです。日々街が更新されていく様子を彼はどんな思いでみつめていたのでしょうか。空は雲に覆われ、私には少し淋しげに感じられますが、こちら側には明るい陽がさしてきているようです。



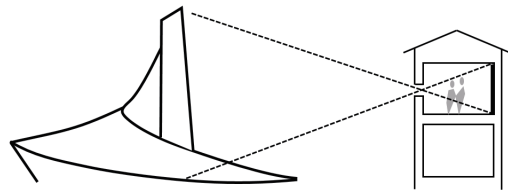
ガイドスタッフ K

ホンマタカシ

「ピンホールシリーズ」より《代々木体育館》 2013

彼の写真作品は現代の街並みや人物をありのまま表現しようとしています。少々ピンボケの画像ですが、誰もが知っている1964年の東京オリンピック競技会場として建設された代々木体育館です。

これは体育館に近いビルの一室をピンホールカメラにして撮影されました。今でも斬新なフォルムの建物ですが、当時に想いを馳せノスタルジックな気分になってみてはいかがでしょうか。



ガイドスタッフS

大岩オスカール

〈隔離生活ドローイングシリーズ〉について 2020

さあ、空想の旅に出かけようか！コロナ禍の隔離生活中に自宅の小さな机からオスカールが発表した連作です。いつもは活気に溢れるこの場所、行くはずだったあの場所へ。突然生活が一変した中、どれも一時停止ボタンを押したようにひっそり。けれども私には、日常への「再開ボタン」が押されるのを今か今かと待っている、前向きなエネルギーに満ちているようにも思えます。さてあなたなら、どこに行きますか？空想の旅はいつでも出発可能です。私は遠方の実家へ、、、久々に両親と畳でごろごろ昼寝、最高です。



ガイドスタッフT

蜷川実花 作品全体として

誰もが思わず目を見張る鮮やかな色、色、色！
豊かな色を表現したいのかな？私は最初そう思いました。が、作家は言います、「色味の強い物を意識して撮影しているわけではない」「自分の好みに忠実に物を作っているだけ」と。実際、デジタル撮影が全盛の今も多くの写真はフィルムで撮影し、その色味に一切手を加えることはないのです。
作家の思いはもっと別の、人間が作り出す矛盾、生と死の間にある歪み、光と影の表裏一体の関係などにあると言います。その深い問題意識と溢れ出る個性的な色彩感覚が相まって私たち見る者を魅了するのです。



ガイドスタッフ T

指差し作業員、竹内公太 作品について

ヘッドホンが2つ。感染対策用の青いキャップ付けないきゃいけないのか…少々面倒くさい…と思わずに、ぜひ耳に当ててほしい。そこから流れてくる音を聴きながら、手前で刻々と変化するパソコン画面に目をやりつつ、窪んだ空間の奥に映る白い誰かに指を差されてみる。じわじわと蘇る感覚。あの日、3・11以降、怖くて、分からなくて、毎日どこか緊張していて、しみしみとお腹が痛いような日々の感覚。人間は、良い意味でも悪い意味でも忘れていく生き物だから、忘れるべきでない事を考えるためには、こんな作品が必要なのだと思う。

ガイドスタッフY



島袋道浩 《南半球のクリスマス》 1994

とある5月の暖かな日、電車の窓からぼんやり海辺の景色を眺めていたら、あれっ？今のサンタだった？いや、いくらなんでも季節外れでしょう？それにあのゴミ袋は？環境保護活動かな？

一瞬の不思議な光景が見知らぬ誰かの心にいつまでも残るかもしれません。南半球に住む方であれば故郷のクリスマスを思い出してしまうかも。観る人を慌ただしい日常から一時解き放ち、クスッとさせたりほっこりさせたり。でもちょっと考えさせたり。ユーモラスな行動が紡ぎ出す見知らぬ人々とのコミュニケーションも作品の一部なのかもしれません。



ガイドスタッフ M

三宅砂織 フォトグラムの技法を中心に

みなさんの後ろに流れている映像、よく見ると、風景の明暗が反転したものと解りますね。映像のネガ像、明るく見えるのが影の部分です。平面の作品に使われているフォトグラムは正に「影を見せる」写真の技法です。通常のフォトグラムは印画紙の上に物を置き、上から光を当てて影になった部分が白い形として印画されます。三宅さんの作品の面白いところは、この、「上に乗せる物」が「絵」であるところなのです。しかも、その絵は、すでに存在する写真を見ながら、その反転したネガ像を透明なシートに描き起こしたもののなのです。こちらの作品も見逃さないで下さいね。

ガイドスタッフH



照屋勇賢 《Notice - Forest: Madison Avenue》 2011

「記憶」とは、人間だけにあるものなののでしょうか？

照屋勇賢は、「紙」の記憶を呼び覚まそうとしています。

この作品で、「紙がかつては森の木だった」ということ

を思い出す手伝いをしているのです。紙袋の中にこんな

繊細で美しい空間を作ってしまうなんて、まるで魔法

使いみたいですね！

世界中で毎日大量に使われ、捨てられている紙袋。

これから紙袋を手にとるときには、この小さな木が

ふと心に浮かんできそうです。



ガイドスタッフ K

文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。



ガイドスタッフ〇

アルナルド・ポモドーロ

《太陽のジャイロスコープ》 1988

直径約 4m！重量約 5 トン！建築や舞台美術も学んだイタリアの彫刻家ポモドーロらしいスケールの大きさです。大きさだけでなく二つに分かれた円盤に刻まれた深く鋭い裂け目のような形にも注目してみてください。天の星々の位置やその動きを知るためにつくられた中世の天球儀がヒントとなったこの作品、かつては 24 時間かけてゆっくりと回転していました。

今はこの空間で天気や時間によって変化する太陽の光を受けてさまざまに違った表情を見せてくれます。

さて、今日の空模様は？



ガイドスタッフ S

オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング》について

見上げた絵の中からオノ・ヨーコが語りかけてくるようです。あなたに届いた言葉はありましたか？インストラクション（指示）・ペインティングは、彼女から届いた言葉とあなたの抱いたイメージが響き合って成り立つ作品です。60年も前にオノ・ヨーコが始めたインストラクション・ペインティングは、一つ一つの言葉が文字通りキーワードとなり、現在も私たちの想像の扉を次々と開け続けて行きます。

追伸：メインエントランスを出て左側、野外のオノ・ヨーコ《クラウド・ピース》もご覧ください。



ガイドスタッフ K

アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

「鉄」といえば硬く重い工業用の材料をイメージする方が多いでしょう。1959年アメリカで見た抽象彫刻に刺激を受け、カロは鉄に赤や黄などの鮮やかな彩色を施し、台座を取り払い、軽やかで自由な形を生み出しました。新しい鉄の彫刻の誕生です。海の変化を表すタイトルの通り、明るいブルーグリーンの海、刻々と変化し、足元に打ち寄せる柔らかな波、穏やかな波の音が聞こえてきそうな感じがしませんか。お帰りの際には1階展示室入り口から外を眺めて下さい。カロの《発見の塔》が見えます。開館時からずっとここで私たちを楽しませてくれています。

みなさんは何を感じられますか？

ガイドスタッフ T



宮島達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものと関係をつなぐ
それは永遠に続く》 1998

照明のない展示室に足を踏み入れ、奥でぼわんと赤い光を放つこの作品を見たとき、どんな印象を受けましたか？ 作品名の「それ」は作品そのものを指しています。変化し、関係し、続くこと。国境や人種といった枠組みを越えて共有できること。宮島作品で繰り返し語られるテーマです。

ちなみに今目の前にある作品は、2019年のリニューアルオープンにともない、一部修復されたものですが、約20年の間に1728個のデジタルカウンターは明るさに個体差が生じ、点かなくなったものもあったそう。私はこれにも命のようなものや時間の流れを感じてしまうのです。

ガイドスタッフF

